

抄録

結核菌ノ對煮沸抵抗力(煮沸脱色ニヨ
ル鑑別法)

カール、ブライス氏

(Wiener Klin. Wochenschr. 1922. Nr. 49 S. 841)

従來各種ノ抗酸性菌ト人型結核菌トハ培養及動物試験ヲ行フニ非ザレバ之レヲ區別スルコト困難ニシテ、諸種ノ染色法ニヨリテハ唯僅カニ恥垢菌ヲ區別シ得ルニ過ギザリシガ、ブライス氏ハ左ノ如キ簡單ナル方法ニヨリ之レヲ鑑別シ得ベシト稱ス。即チ被檢物ヲ載物硝子ニ塗抹シ、之レヲ固定スルコト無ク直チニソノ上ニ「カルボールフクシン」液ヲ滴下シ、載物硝子ノ長軸ニ沿ヒ靜カニ左右ニ動かシツ、小ナル火焰上ニ之レヲ熱シ著明ニ水蒸氣ヲ發スルニ至ラシム。然ル後鐵製ノ器ニ水ヲ容レタルモノ、中ニ投入シテ之レヲ煮沸シタル後取り出シ稀薄ナル「メチレンブラウ」液ニテ再ビ染色ス。結核菌ハ五分間煮沸スルモ猶ホ充分脱色セズシテ赤色ヲ呈スレドモ、他ノ従來知ラレタル凡テノ抗酸

性菌ハ一分間以内ノ煮沸ニヨリテ脱色シ「メチレンブラウ」ノ爲メ青染セラル。而シテ結核菌中牛鳥及冷血動物ノ結核菌ハ人型菌ヨリモ脱色シ易シ。(坂口)

金魚ニ抗酸性菌ヲ以テシタル實驗的
研究

在佛領東京 シン、メイ

(C. F. Bakr, orig. 14 88 II. 1 1922)

一、魚結核菌ヲ以テノ實驗

魚抗酸性菌ニ就テハ今日迄尙ホ簡明サレズアリシニ余ノ實驗ノ結果魚結核菌ハ普通ノ培地ニ室溫ニ於テ速カニ發育ス新培養ハ人結核菌ト同様ノ性質ヲ有スルモ舊培養ニアリテハ糸狀〇ノ狀ヲ連鎖狀ヲ呈ス魚ノ食餌感染試験ハ二十四時間内ニ大部分ノ菌ハ腸内ニ侵入シ腸ニ變化ヲ與ヘズ他臟器ニ侵入セズ又一部ノ菌ハ口腔粘膜ニ止マリ三十日後ニハ菌全部死スルモ若シ食餌感染試験ニ傷ケラレタル部分アレバ侵入門戸トナリ容易ニ體內臟器ニ侵入ス又菌乳劑ヲ製シ眼内筋肉内腹腔内ニ注射スルト注射部位ニ長ク滯留セズシテ速カニ種々臟器内即チ腦内腹膜肝臟脾臟腎臟生殖器ニ侵入ス而シテ多數ノ例ニ就テ見ルニ眼、筋肉内、腹腔内ニ注射

スルト菌ハ先ヅ腦内ニ入り發育増殖シ徐々ニ他臓器ニ入ル
腦内ハ腹腔内感染後一乃至三日ニシテ侵入スルヲ認ム筋肉
内感染ハ注射部位ニ結節ヲ作ルコト、腎臓ニハ軽度ノ變化
ヲ呈ス魚結核菌ニ對スル金魚ノ腎臓ハ人型菌ニ對スル溫血
動物ノ肺ノ如ク好發部位ニシテ他臓器ヨリ菌數多ク且ツ菌
増殖ヲ認ム而シ腹腔内注射ヲ施スト五日目ニシテ肝臓脾臓
腹膜ニ於テ菌ノ發育増殖ヲ認メ菌ハ大部分絲狀形トナリ魚
結核菌ハ金魚ノ諸臓器ノ喰細胞ニヨリ被喰サレルコト甚ダ
少ナシ而シ肝臓及ビ腹腔ハ例外ニシテ細胞内ニ多シ注射後
六乃至十五日ヲ經過スルト肝臓脾臓腹膜ニ於テ強ク喰菌サ
レ肝臓腹膜ニ於テハ菌ハ殆ド細胞内ニノミ存ス魚結核ノ病
竈ニハ巨大細胞ヲ認メズシテ變性及ビ炎症ヲ呈ス而シテ癩
細胞様ニ菌ノ充實サレ居ル細胞アリ魚結核菌ハ培養基面ニ
於テ抵抗力強ク「グリセリン」肉汁培養ニテ三年ヲ經タルモ
尙ホ感染力ヲ有ス即チ金魚 (*Phoxinus phoxinus*) ニ此ノ菌乳劑
○・二坵ヲ (譯者曰ク菌量ハ不明ナレドモ全部ヲ乳劑トシ
タルナラン) 以テ感染シ得タリ。 (渡邊)

二、水中抗酸性菌ヲ以テノ實驗

(*Mycobacterium aquae* B. Galli-Valeris)

抗酸性菌ハ甚ダ種々ナル性質ヲ有スル故ニ著者ハ「チモテ

ーヤ」水中抗酸性菌ナドモ魚結核菌ト同一種屬ニ非ラザル
ヤヲ疑ヒ先ヅ水中ノ *Mycobac. aquae* ヲ以テ金魚ニ實驗シ
タリ本菌ハ普通培養基ニ室溫ニテ好ク發育ス殊ニ卵黃寒天
ヲ良シトス三日後ニ菌集落ヲ作り集落ハ不正ニシテ白黃色
浸潤ヲ呈シ脂肪様光澤ヲ帶ブ七日後ニハ厚キ菌苔トナル形
態染色共人型菌ニ均シ菌乳劑ヲ金魚眼内ニ注射スルト眼自
己ニハ變化ヲ起サザルガ一定量以上ヲ注射スルト他臓器内
ニ侵入ス腹腔内又ハ皮下感染ニ於テハ菌ハ唯局所ニ止マラ
ズシテ諸臓器内ニ侵入スルモ本抗酸性菌ハ金魚ノ諸臓器内
ニ於テ溶菌現象ヲ呈ス又タ注射後七日ニ至レバ稀ニハ諸臓
器内ニ菌ヲ證明スルモ多クハ唯ダ脾臓腎臓ニ變化シタル菌
ヲ認ムルニ落ギズ十日ヲ經テ死シタル金魚ノ肝臓ニハ顆粒
狀ノ抗酸性菌ヲ認ムモノ又ハ菌ヲ認メザルモノアリ又タ例
外トシテ百二十乃至百二十六日ニシテ尙ホ○ノ狀絲狀腫脹
狀ノ如ク「アクチノミコーチス」ノ如キ形態ノ菌ヲ認ムルコ
トアリ故ニ金魚ニ種々ノ方法ヲ以テ感染シテモ唯ダ注射局
部ニ變化ヲ殘スノミ依テ次ノ結論ヲ下シタリ。
金魚體内ニ於テ水中抗酸性菌ハ細胞外溶菌現象ヲ呈スルモ
魚結核菌ハ之ニ反シ斯ル現象僅微ナリ。

三、癩菌ヲ以テノ實驗

(Mycobact. Leprae, Hanssen.)

ハッチンソン氏ハ人癩ハ魚類ヲ喰フ事ニ依テ來ルト云ヘリ
 コールト、モリス氏等ハ金魚類ヲ「レブラ」菌培養ノ實驗
 ニ用ヒ良果ヲ得タリト其レハ「レブラ」菌ハ低溫度ノ必要ナ
 ル故北洋ノ魚臟器中ニ癩菌ヲ證明シタリト云フ基礎ニヨレ
 リ又タズバール氏ハ癩菌ハ攝氏十度ニ於テ發育シタリト云
 ヒタリ(譯者曰ク以上諸氏ノ云フ所信ズルニ足ラズ)著者ハ
 ソコデ金魚ヲ使用シ癩菌ノ實驗ニ著手シタリ即チ癩患者鼻
 腔分泌物及ビ癩結節ヲ以テ實驗ヲ試ミタリ今癩菌ヲ金魚ノ
 腹腔内皮下ニ注射シタルニ菌ハ速カニ腦内ニ侵入シ此所ニ
 於テ發育増殖シ又タ肺臟肝臟腎臟内ニ侵入ス癩菌ハ腎臟脾
 臟生殖器内ニ於テハ三乃至四ケ月間發育増殖モ又タ消滅
 モ認メズ又眼内ニ癩菌ヲ注射スルニ百七日ニシテ眼内ヨリ
 消失スルモ他臟器ニハ之ヲ認ム又タ癩菌ノ腹腔内腦内筋肉
 内感染ニ有リテハ實驗金魚ノ全部ガ多數ノ癩菌ヲ腎臟内ニ
 認ム又タ癩菌ヲ室溫ニ於テ食鹽水中ニ四ケ月間保有シタル
 モ金魚ニ對シテハ新鮮ノモノト殆ド同様ノ結果ヲ收ム而シ
 テ金魚體内ニ於テハ癩菌ハ細胞内ニ被喰セラレルコト強シ
 スク注射セラレタル癩菌ハ臟器内ニ侵入スルコトヲ確メラ
 レタル故今對照トシテ百十一尾ノ健常金魚ヨリ千八百枚ノ

塗抹標本ヲ製シ調査シタルニ臟器内ハ何レモ抗酸性菌ヲ認
 メズ唯腸内ニハ多數ノ結核菌ニ似タル抗酸性菌ヲ認メタル
 モコレハ非病原性菌ナリ斯ル問題ヲ決定スルニハ病原性ヲ
 有スル抗酸性菌ガ金魚ノ腸内ニ存在スルヤ否ヤ而シテ斯ル
 菌ガ他ノ金魚ニ移行シ得ルヤ否ヤヲ決定セザル可カラズ即
 チ金魚ノ腸内ニ屢々病原性ヲ有スル Bacterium fluorescens
 ノ存在スルコトニ注意ス可シ。(渡邊)

結核菌ト絲狀菌(結核類似)トノ區別ニ

就テ

シュミット、ハンス

(Zeits. f. Klin. u. Tuberculose Bd. 46, S. 456, 1920)

結核菌ト絲狀菌トハ脂肪體ガ根柢トナリテ居ルカラ兩者ノ
 區別ガ出來ズ補體結合試驗凝集反應ヤ動物ニ對スル組織的
 變化ハ唯比較的ノ問題ナリ又タ「アルレルギー」反應ニ於テ
 モ。部分的生分免疫元作用ニ於テモ區別出來ザルト云フ(譯
 者曰ク信ズルニ足ラズ)。(渡邊)

活動性結核ノ證明ニ血球ヲ用フル一 種ノ類屬反應ニ就テ

ク
ン
メ
ル

(Zbl. f. Bakt. 1921, S. 1822)

十%「ペプトン」肉汁一〇蚝ニ結核患者ノ血液一〇蚝ヲ加ヘ遠心分離シ其ノ沈澱物ヲ用ヒテ血液ヲ採ラレシ者竝ニ他ノ者(結核、非結核、結核類似)ノ皮内ニ壓ヲ加ヘ約七耗ノ大サヲ呈スル迄注入ス而シテ二十四時間後ニハ腫脹増大炎症ヲ呈スレバーノ活動性結核ノ存在ヲ證明スルト云フ而シテコレハ血液ヲ採ラレシ者ト同一ノ要件アル類屬反應ナリト云フ。

(渡邊)

「ツベルクリン」反應ノ本態ニ就テ

ハ
ー
、
ゼ
ル
ター

(Z. f. Immunitätsforsch. Orig. 1921, Bd. 29, S. 225.)

「ツベルクリン」反應ハ免疫反應ニ非ラズ「ツベルクリン」反應強キ「モルモット」ニ於テ結核免疫體證明出來ズ本反應ハ抗特異性ノ炎症反應ト謂フ可シ斯ル「アナフィラキシー」ノ一症狀ハ結核豫防ニ向テ意義少ナキ蛋白反應ナリ。(渡邊)

「ツベルクリン」反應ノ本態ニ就テ

カ
ー
ル
、
チ
ー
レ
ル

(Zeitschr. f. Immunitätsforsch. 1921.)

ゼルター氏ノ所論ニ反對シテ著者ハ結核ニ對スル「ツベルクリン」反應ハ特異性ノ傾向ヲ有スゼルター氏ハ「ツベルクリン」以外ノ物質ニテ起ルト云フガゾルゴス氏ハ「デフテリー」赤痢毒素ヲ以テシテハ然ラズ又タ皮下ニ「ツベルクリン」ヲ注射スルト病竈ニ反應炎症ヲ起スモ血清皮膚注射ニテハ起ラズト云フ著者ハソコデ「ツベルクリン」ヲ濾過セル液ヲ以テシテモ反應ヲ呈シ「ツベルクリン」以外ノ物質「アルブモージェ」培養肉汁、肝臟「エキス」、「スタヒロリヂン」「コライン」「トリコヒチン」ヲ以テモ「ツベルクリン」様反應ヲ呈シタリ此ノ反應者ハ恐クハ結核患者ナリ而シテ著者ハ實驗ヲ動物ニ換テ「ツベルクリン」反應ヲ檢シタルニ少量ノ死結核菌ヲ注射シタモノニモ反應スル(譯者曰ク疑ハシ)ガ健康動物ハ然ラズ「ツベルクロトキシシン」ニテモ亦タ同様ノ成績ニ達スルト云ヒ著者ハ遂ニ結核ノ「ツベルクリン」反應ハ固有ノ意義ニ於ケル免疫反應ニ非ラズシテ細胞反應ナリ又タレワントウイスキー氏ガ「ツベルクリン」反應ハ結核免

疫上意義アルト云フニ對シ著者ハ種々ノ實驗ノ結果「ツベルクリン」ノ比較的免疫動物血清中ニ溶菌素ヲ確實ニ證明シ得ズ「ツベルクリン」過敏ハ組織(細胞)免疫ナリト云フ

(渡邊)

結核菌類似抗酸性菌檢索ニ就テ特異

染色法

於プレスロー ベンデル、ウイルゾー

(D. med. W. 1922, Nr. 12, S. 381-383.)

石炭酸「フクシン」染色後三%鹽酸「アルコホル」ニテ脱色シ後チ「アルコホルピクリン」酸^(「ピクリン」酸水飽和液無水「アルコホル」)等分ノモノニテ一分間染色スレバ尿結晶體喀痰中ノ異物ハ「ピクリン」酸ニテ僅カニ無色ニ染色サレル而シテ「ピクリン」酸處置後「メチーレンブラウ」溶液ニテ染色スルト尙ホ一層良好ナリ。

(渡邊)

「ツベルクリン」反應ニ就テ實驗的檢査

クロブストック

(Berl. kl. W. 1921, S. 1099.)

結核「モルモット」ニ對シ「ツベルクリン」〇・五坵ヲ以テ斃

死スル場合アリ然ラザルモ尙ホ局所竝ニ全身反應等ヨリシテ此ノ反應性物質ハ治療ノ方針トナル可キモノニ非ラザル故用ユ可カラズ。

(渡邊)

皮膚結核ニ對スル一新皮内反應ニ就テ

ブ サ ッ カ

(W. Kl. W. 1921, S. 570.)

健康馬血清〇・二坵ヲ皮内ニ注射シテ「ツベルクリン」反應ト同様ノ反應像ヲ呈スルコトヲ實驗シ該反應ハ二十時間乃至二十六時間ニシテ最高度ニ達シ非結核患者ニハ起ラズト云フ其ノ成績次ノ如シ。

皮膚	結核	九四例	八十%陽性	
		一一九例中	一八例	十四%陰性
			七例	六%ハ不明決定シ難シ

「ループス、エリ	一例	陽性
テマトーデス」		
四例中	三例	陰性
肺 結核	三例	全部陽性

(渡邊)

結核ニ對スル治療血清問題

ブライシス、コルチル、ローマン、オイゲン

(Berl. z. Kl. d. Tuberculose 1921, Bd. 47, S. 202.)

動物實驗竝ニ人體結核ノ治療實驗ヲ基礎トシテ結論シテ曰ク結核免疫血清中ニハ凝集素ハ他免疫體ヨリ最モ強ク存在シ補體結合反應物質最モ少ナシ沈澱素ナドハ認め難シ而シテ豫防治療ニハ何等ノ效果ナシト斷定セリ。(渡邊)

「ツベルクリン」反應ノ應用

クレンペレル、フヘリクス

(D. m. W. 1922, S. 13.)

「ツベルクリン」治療ヲ實驗細菌學的臨牀的經驗位置ヨリ觀察スルニ次ノ如シ。

- 一、本療法ハ要求セラレタルトキニ行フモノニシテ其レ以外ニ行フ可キモノニ非ラズ結核ニ對シテハ衛生的食餌的療法最モ良シ一見健康ニシテ唯ダ「ピルケー」反應ガ陽性ナリトテ「ツベルクリン」療法ヲ行フ可キモノニ非ラズ。
- 二、「ツベルクリン」ハ分量ヲ考ヘザル可カラズ種類ハ考フル必要ナキモ舊「ツベルクリン」ハ病竈反應強キガ新「ツベルクリン」ハ舊「ツベルクリン」ヨリ反應弱クシテムフ氏ノ MFBK ヨリ又タゼルテル氏ノ生「ツベルクリン」ヨリモ強シ而シ是レハ今急ニ斷定ス可キモノニ非ラズ。
- 三、「ツベルクリン」診斷反應ハ皮膚應用ニアリ。

其レハ皮内皮下皮面ニ用ユルガ皮下ニ用ユルニハ用量ニ注意セザルト不測ノ危険ヲ及ボス事アリ。

四、人ニ對シテ最モ繁ク應用スルハ「ピルケー」ヤ皮内反應ニシテ又タ注射分量ヲ増進スルコトハ唯ダ臨牀的方面ノ見解ニ基クヲ良シトス其レニ由テ徐々ニ分量ヲ増シ又タ個人性質ヲ考ヘザル可カラズ強キ反應ハ殊ニ注意セヨ。

五、限界度「ツベルクリン」ニ對シ完全ニ不過敏性ナルモノニ大量ノ「ツベルクリン」ヲ用ユル可カラズ斯ル人ハ臨牀的治療者ナレバナリ。(渡邊)

結核菌ノ卵黃液培地發育ニ就テ

ベッケル、エドナルド

(Zeitschr. f. Hyg. u. Inf. Bd. 95, H. 3, S. 241-246, 1922)

ベスレドカ法ヲ反復シ少シ改良シタリ。

卵黃水培養基製法

一〇〇坵ノ蒸餾水ニ五%ノ比ニ卵黃ヲ入レ後チ一%ノ比ニ曹達ヲ加ヘ攝氏七〇乃至七五度ニテ二十分加熱シ二%ノ「グリセリン」肉汁五〇坵中ニ此ノ卵黃水五坵ヲ加フ後蒸氣消毒ヲナス。

本培養基ハ發育良好ナリト云フ。(渡邊)

結核菌染色上亞硫酸脫色法ノ批判

フラン、ベルゲル

(C. F. Baker, Orig. Id. 88, II, 7/8, 1922.)

チール氏染色法ノ變法トシテコンリッヒ氏亞硫酸鹽脫色法アリ亞硫酸鹽ハコンリッヒ氏ノ發表以前ヨリ結核菌分色ニ應用セラレタルモ稀鹽酸ニ比シ勝レル點ナシ且抗酸性菌各種ノ鑑別ニナラズトテ著者ハ自己ノ實驗上ヨリ一乃至一〇%亞硫酸曹達六〇%「アルコホル」併用法ガ比較的良好ナレドモ實用スル程度ノモノナラズ最近十二ケ年間諸種ノ新變法ヲ試ミタルニ何レモチールテルセン氏法ニ及バズ。(田中)

フリードマン龜類結核菌劑ノ内肛結

核ニ及ボス效力ノ批判

(H. Ulrich und H. Grass, Beihette zur Z. f. The. Nr.

3, 1921)

著者等ノ得タル結果ヨリ次ノ如ク結論セリ。

一。フリードマン氏ノ龜類結核菌ヨリ作レル製劑ヲ以テ結核ヲ豫防スル事或ハ之レヲ以テ結核ノ身體中ニ於ケル傳播

ヲ防禦ナシ得ル事ハ證セラレザリキ。

二。内肛結核患者ノ結核毒素ニヨル症狀ガ減退セシ事稀ナラズ、自覺症狀良好ニ向ヒ咯痰盜汗等ノ減少セシ事アリ、是等ノ事ハ屢々一時的ナリキ、併乍ラ持續シテ快癒ニ向ヘルモノアリ。

三。時ニハ局所ニ所謂フリードマン結核ヲ生ゼシ事アリ、熱發出血等ヲ來シ時ニハ乾酪性肺炎、粟粒結核ヲ來シ死ニ導ケルモノアリ。

四。フリードマン氏劑ハ外來患者ニ用ユルニ適セズ。

五。他面ニ於テ尙一種ノ效力アル故ニ尙研究ヲ要ス。(今村)

「ツベルクリン」療法ノ現状ニ就テ

(E. Klemperer, D. m. W. Nr. 1, 1922.)

一適用。衛生食餌療法ニヨリテ引續キ經過良好ナルモノニハ「ツベルクリン」ハ必要ナラズ、臨牀的ニ健康ナルモ單ニビルケ反應陽性ナリトテ「ツベルクリン」ヲ與フル事ハ正當ナラズ。

二製劑。製劑ノ選擇ヨリモ其分量ノ選擇ニ注意スベシ。唯考慮スベキハ「アルトツベルクリン」ノ病竈反應強キ事ナリ。新「ツベルクリン」、ムッフノ「バルチゲン」及ゼルター

ノ「ヴァイタル・ツベルクリン」ハ「アルト・ツベルクリン」ニ比シテ病竈反應微弱ナリ「ヴァイタル・ツベルクリン」ニモ他ノモノヨリ優レタル點ヲ認メズ。

三注射方法。分量ヲ正確ニ知ル爲ニハ皮下注射ハ最モ信頼スベキ注射法ナリ。他ノ皮膚内注射法、ベルクター子法モ亦用ユルニ足ル。ボンドルフノ治療的ビルケ法ハ「ツベルクリン」療法ヲ改良セシモノト云フ證據ナシ。

四分量。「ツベルクリン」療法ハ強キ反應ヲ避ケ、個人のニ處置スベキ事肝要ナリ。最初ノ分量ニ細心ノ注意ヲ拂フベキモノニテ成可少量ヲ選ブベシ。ビルケ氏反應又ハ皮膚内反應ノ度合ハ最初ノ分量ヲ定ムル爲ニ確實ナラザルモノ「ヒント」ヲ得ベシ、増量ハ治療ノ效果ヲ見テ考量スベシ。

五目的。「ツベルクリン」療法ノ目的ハ臨牀的治癒ニアリ甚ダ大量ノ「ツベルクリン」ニ對シテモ無反應トマデ進ム如キハ其目的ニアラズ。

(今村)

生菌結核菌ノ應用ハ結核治療法ノ進歩ナルカ

(H. Selter: D. M. W. Nr. 36, 1922)

抄録

ケーニヒスブルグ大學教授ゼルターハ先ニ「ヴァイタル・ツベルクリン」ヲ作り「ゼヒシツシエ」血清製造所ヨリ發賣セシメタリ。「ヴァイタル・ツベルクリン」ハ「ツベルクリン」及人型結核菌ノ磨碎ニヨリテ生ジタル結核菌物質及少量ノ弱毒性人型結核菌ノ生菌ヲ含有セルモノナリ。ゼルターハ此「ヴァイタル・ツベルクリン」ヲ「モルモット」ニ接種スル事ニヨリテ毒力強キ結核菌ヲ以テスルニ二次感染ニ對スル著明ノ抵抗力ヲ認メタリ、此動物試験ノ成績ニ立脚シテ人間ノ結核患者ニモ「ヴァイタル・ツベルクリン」ヲ用フルニ至レリ。ケーニヒスブルグ大學ニテ結核患者ノ多數ニ用ヒ、本成績ヲ綜合シテゼルターハ次ノ如ク論ゼリ。

「ヴァイタル・ツベルクリン」ハ生菌乳劑ト等シク身體内ニ於ケル免疫ヲ助長セシムル事少シ。

アル場合ニ良好ナル結果ヲ得タルモ是ハ「ヴァイタル・ツベルクリン」内ニ含マル、結核菌物質ノ「ツベルクリン」ノ效力ニ歸スベキモノナリ。

生菌結核菌ノ作用ハ其菌體内ニ含マル、「ツベルクリン」ノ作用ニヨルモノナリ而シテ結核患者ニ餘リ多量ナラザル生菌結核菌ヲ注射シタル時ハ、上記ノ作用ノ他ニ何等ノ效力無シ。

生菌結核菌ノ應用ヲ以テ「ワクチン」療法ノ意味ヲ有スル特種療法トナス事能ハズ。(今村)

結核菌體及「ツベルクリン」成分ノ結核ノ進行ニ及ボス影響

吉澤 惟 雄著自抄

著者ハ、先ヅ海狸ニ結核菌ヲ接種シ其後或ル結核菌體又ハ「ツベルクリン」成分ヲ「ワクチン」トシテ注射シ其結核病ノ進行ニ及ボス影響ヲ觀察セルニ、(一)舊「ツベルクリン」ノ微量ヲ連續的ニ注射セル時ハ病變ハ對照ヨリモ著明トナリタリ。(二)舊「ツベルクリン」ノ大量ヲ同様ニ注射セル場合ニハ病變ハ對照ヨリモ輕度ナリ。(三)舊「ツベルクリン」ノ硫酸「アンモン」ニ由ル沈渣ヲ「バンクレアチン」ニテ消化シ「ツベルクリン」反應成分ヲ破壊シ去リタルモノヲ同様ニ注射セルニ病變ハ對照ニ比シ一般ニ輕度ニシテ菌接種局所ノ潰瘍成生ガ抑止サル、カ又ハヨリ早ク癩痕形成シテ治癒スルモノ多シ。(四)「ブイヨン」ヲ同様ニ處置セルモノニハ其作用ナシ。(五)舊「ツベルクリン」ニ「アルコホル」ヲ加ヘ生ズル沈澱物ヲ除去シ「アルコホル」溶性分ヲ採取シ之ヲ更ニ「バンクレアチン」ニテ消化シ「ツベルクリン」反應成分ヲ出

來ルダケ除去セルモノヲ同様ニ用キタル場合ニ於テハ最モ著明ニ結核病變ヲ輕度ナラシメタリ。即菌接種局所ニハ潰瘍ヲ生成セシメザリシカ又ハ潰瘍ノ癩痕形成ヲ對照ニ比シ非常ニ早カラシメタリ。組織學的ニハ脾臟ニ定型的ノ結核竈ヲ認メ得ザルモノ多ク結核竈アルモ乾酪變性及細胞ノ「チクローゼ」存在セズ。(六)此「アルコホル」溶性消化「ツベルクリン」ノ效果ハ大量ノ結核菌ヲ接種シ後、一定時日(二、四日)ヨリ一週二回位ヅ、注射スル方法ヲ採ル時ハ最モ著明ニ其作用ヲ發揮セシメ、對照トノ差ヲ最モ著明ナラシメ得。(七)幼若ナル結核菌若ク乾燥シ瑪瑙球磨器ニテ充分ヨク磨碎シ之レヨリ「アルコホル」溶性「エーテル」不溶成分、「アルコホル」及「エーテル」溶成分、及「エーテル」溶性「アルコホル」不溶成分ノ三者ヲ造リタルニ「ワクチン」トシテ使用セル際前二者ニハ結核病變ヲ輕度ナラシムル作用アリタレドモ後者ハ全然其作用ヲ缺キタリ。(八)斯クノ如ク舊「ツベルクリン」中ノ「アルコホル」溶性成分ヲ消化セルモノハ結核病ノ個體ニ對スル毒性少ナク病變ヲ輕度ナラシムル作用ヲ有スルガ故之ヲ人體ニ應用シ差支ヘナカル可シト信シ應用セリ。其結果 イ、狼瘡及 Tuberculosis verrucosa cutis ニ對シ著シキ治癒作用ヲ呈シ癩痕ヲ形成シ狼瘡結節ヲ消失セ

シメタリ。ロ、皮膚ノ狼瘡性潰瘍ノ甚グ大ナルモノニテモ數ケ月ノ中ニ治癒セシメタリ。ハ、下肢ノバザン氏紅斑ヨリ出發セル結核性潰瘍ノ疼痛甚ダシク漸次擴ガリツ、アルモノニ應用セルニ其疼痛ヲ消失セシメ進行ヲ抑止シ二ケ月後ニハ癍痕ヲ形成シ治癒セシメタリ。ニ、皮膚腺病潰瘍ヲ有スル一名モ數ケ月後ニ治癒シタルモノアリ。(八)是等結核病變ノ治癒ニ至ル經過中常ニ肉芽又ハ表皮形成ノ急ニ増大スル状態ヲ目撃シ得タリ。(九)著者ハ此結核ノ進行ヲ抑制乃至治癒ニ至ラシムル作用ノ理由ニ關シテハ、未ダ説明ヲ下ス能ハザルモ結核ノ免疫乃至治癒機轉ガ補體結合性抗體「トロピン」「オプソニン」等ノ血清中ニ存在スル量の關係ニテハ説明ス可カラズシテ此機轉ハ體組織細胞ト菌體トノ間ニ發生スル一種ノ反應乃至反應產生物ニ重大ナル關係ヲ有ス可シトノ多クノ先進研究者ノ考案ヲ正當ナリト假定セバ「ツベルクリン」乃至其他ノ「ワクチン」中ヨリ「ツベルクリン」反應ヲ起コシ其結果身體ニ「アンチアナヒラクシー」状態即「ツベルクリン」不感受性ヲ起コサシムル物質ヲ除去セルモノヲ用キテ無害有效ナル刺戟ヲ細胞及結核菌體間ニ與ヘ得可シトスル新方面ノ研究ニ「ヒント」ヲ與ヘ得可ク換言スレバ刺戟ノ量的關係ノ研究ヲ脱シ質的關係ノ研究ヲ促

ス可キ興味アル事實ナリト信ゼリ(實驗醫學雜誌六卷一號、大正十一年秋季大日本衛生學會演說及傳染病研究所集談會發表論說)。

ダイケ・ムッフ・バルチゲン」ヲ以テセル 治療成績

(H. Gran und H. Schulte-Figges: *Buhefte zur Z. f. The Nr. 7, 1929*)

肺結核ニ對スルダイケ、ムッフノ結核菌ヨリ製セシ「バルチゲン」ノ效力ニ就テ臨牀家ノ報告ヲ簡單ニ列擧セリ。

第一、良成績

レーメル及ベルゲルハ囉音ノ減少、全身症狀ノ良好、熱ノ降下ヲ認メタリ。

フィシニルハ又良成績ヲ擧グ、

ダイケ及ダイケ・アルトステットハ六三七例ヲ報告セリ、第二期患者ハ三〇%即九一例治癒シ三六%ハ殆ド治癒セリ、治療日數ハ平均二、四月ナリ。第三期患者二三六例中一%ハ治癒シ二九%ハ殆ド治癒シ二五%ハ快方ニ向エリ。治療日數ハ平均四、八月ナリ。治療日數比較的短キ故ニ此報告中ノ「治療」ノ状態ヲ疑フベシ。

レーデル。第二期患者十七人中一人ハ殆ド治癒シ九人ハ快方ニ向ヘリ、第三期患者二三例中七例ハ快方ニ向ヘリ、ブレッケ。第二期患者三三例中六例ハ大ニ快方ニ向ヒ、二例モ亦快方ニ向ヘリ、三一人ノ第三期患者中二〇人ハ快方ニ向ヘリ。

シュルテーチツグス。第二期患者ニテ六一例中四一例ハ快方ニ向ヘリ、四一例中七例ニハ喀痰中ノ結核菌消失セリ。

ジーグルドールベルヒ。四一人ノ第二期患者中四例ハ快方ニ向ヘリ、二六ノ菌喀出者中八人ハ喀痰中ノ菌消失セリ。

グローゲル。第二期一五、第三期七二例ノ八七例ハ快方ニ向ヒ二三例ノ有熱者ハ全部下熱ヲ來シ、六九ノ菌喀出者中一九例ハ菌消失セリ。

第二、成績不定

リーベ竝ニワルトハルドノ報告アリ。

第三 排斥セルモノ

ストラウス。全然排斥セリ。

ヤコブ及ブレヒシユミッド。一四六例ニ用イタリ、他ノ方法ヨリ優越セル點ヲ認メズ。

コイツェル。九四例ニ用イテ特別ノ效果ヲ認メズ。

オット。主トシテ外來患者ノ四八九例ニ用イタリ、第二期

患者ニテハ五六例ハ效果アリシモ四四例ニハ效果ナシ、第三期患者ニハ二、三例ニ效果アリテ二七例ニ效果ナシ。

シッテンヘルム。「ツベルクリン」ト同ジク其用法ヲ會得スル事容易ナラズ。

ツッセウスキ。二一例ニ用イテ效果無シ。

ガツベ。六〇例ニ用イタルガ時ニ效果アルモ大觀スレバ特記スベキ效果ナシ。

バンデリール及レーブケ。「ツベルクリン」治療ヨリモ劣レリト爲シ「バルチゲン」ニヨリテ療法ノ進歩ヲ來セシモノト爲サズ。
(今村)

結核再感染ノ組織的反應所見

(H. Jaffe u. E. Löwenstein (Heidelberg, Klin. d. Tuberculose Bd. 50 1922))

著者ハ結核「モルモット」竝ニ健康「モルモット」ノ各列ヲ用ヒ結核菌液(「アスバラギン」培養五十日ノ者ノ一白金耳ヲ生理的食鹽水五・〇坵ニテ浮游液トス)〇・一坵ヲ「モルモット」後肢ノ拇指球ニ注射シ二日十日十四日二十四日五十日ノ後ニ「エーテル」麻醉ヲ以テ殺シ局部皮膚ヲ筋膜ト共ニ分離シテ之ヲ九十%酒精ニテ固定シ「パラフィン」切片トシテ

組織的檢索ヲ行ヒタリ。

結核再感染ノ「モルモット」ニ於テハ肉眼的ニモ鏡檢的ニモ、白血球性滲出ヲ伴フ急性炎症ノ状態ヲ呈シ、コッホノ述ベタル如ク、感染組織ノ周ニ化膿性組織崩壞ヲ來シ限局性ニシテ、膿ハヤガテ外ニ破レ出デテ次デ治癒機轉ヲ生ジ斯ノ如キ動物ハ局部ニ於ケル結節竝ニ膝窩淋巴腺ノ腫脹ヲ來スコトナシ。結核菌ノ運命ハ白血球（初メ多核白血球後ニ大單核白血球）ニ依リテ喰菌セラル。サレドコノ際ノ防禦機轉ハ局部ノ液化竝ニ排出ニ俟ツ者ノ如ク、結核菌ノ溶解ハ鏡檢的ニ認メザリキ。對照即健常動物ニ接種セル場合ニハ徐々ニ進行スル炎症ヲ來シ十四日ニシテ結核結節ヲ認ムルモ限局又ハ治癒ヲ來スコトナク次デ淋巴腺ニ及ビ約三週ニ於テ特殊炎症ヲ認メタリ。

（仲田）

結核ニ對スル高山療法ノ要約

(H. K. Voigt, Beihfte zur Z. f. The. N. 5 1921.)

高山ノ氣候及高山氣候生理學即チ高山氣候ノ血象、血行、呼吸、新陳代謝、神經系統等ニ及ボス影響ヲ論ジ次ニ高山氣候ノ結核ニ及ボス影響ヲ論ゼリ結論ハ次ノ如シ。
外科的結核疾患ハ平地ニ於テモ太陽光線其他ノ療法ニヨリ

テ良結果ヲ收メ得ベキモ高山ニ於ケル太陽光線及氣候ハ格別ニ有效ナル影響ヲ及ボスベク死亡率ノ減少、治癒率ノ増加等ヲ顯著ナラシム、故ニ外科的結核ノ患者ハ手術ヲ施サズニ高山ニ送り、高山ニ於ケル外科醫ニ必要ナル手術ノ適否ヲ一任スベシ。

之レニ反シテ肺結核、喉頭結核ナドノ患者ハ高山ニ送ルノ必要ナク、平地ニ於テハ高山ニ於テ受クル危險ノ虞レ無クシテ満足スベキ療法ヲ行ヒ得ベシ。

獨逸國內ニテモ日射時多ク、空氣清潔ニテ適當ノ乾燥ヲ保テル地方無キニアラズ、カ、ル地方ニテ轉地療法、日光浴、空氣浴、水浴其他ノ方法ヲ利用シテ肺結核ノ療法ヲ満足スベキ範圍ニ於テ行ヒ得ベシ。

（今村）

實驗動物ノ結核ニ及ボス日光及暖爐ノ

效力

(I. B. Rogers, Am. Rev. The. Vol. VI. No. 2 1922.)

九〇頭ノ「モルモット」ニ人型結核菌ヲ吸入セシメ又ハ皮下接種ニヨリテ罹病セシメタリ、其中三四頭ハ毎日太陽光線ニ初メハ一日五分間後ニハ數時間浴セシメタリ是等ノ動物ノ生存日數ハ平均四七日ナリキ。

二七頭ハ毎日攝氏五五乃至六五度ノ乾燥温中ニ置キタルガ、是等ノ動物ノ生存日數ハ平均四八日ナリキ。二九頭ハ對象動物トセシガ其生存日數平均四八、五日ナリキ。是等ノ三群ノ動物ノ結核病竈ハ殆ド差異ヲ認ムル能ハズ。

一六頭ノ白鼠ノ腹腔内ニ牛型結核菌ヲ二坵注射シ罹病セシメ其半數ハ前記ノ如ク乾燥温ニ曝露セシガ結核病變ハ對象ト差異ヲ認メズ。

結論トシテ著者ハ「モルモット」及白鼠ノ結核ニ對シテ日光及乾燥温ハ何等ノ效能無シト云ヘリ。

附記、ロジャース氏小傳、著者ロジャース氏ハ昨年肺結核ノ爲メニ死セリ。氏ハ貧シキ農夫ノ家ニ生レ、自ラ働キテ學資ヲ得螢雪ノ勞ヲ積ミテ醫師トナレリ、生活中ニ二十ノ論文ヲ殘セシガ其多クハ一九一九年以後ニ發表セラレシ結核ニ關スル氏ノ研究ナリ。結核患者ノ喀痰又ハ結核菌浮游液ヲ點滴狀トシテ「モルモット」ニ吸入セシメシ實驗結核ノ研究中ニ肺結核トナレルハ一九一九年ニシテ其以前ニハロジャース氏ニハ肺結核ノ症狀無カリシモノ、如シ。病篤クシテ自ラ歩行スル事サヘ困難ナル爲ニ研究室ノ机ノ前迄他人ニ助ケラレテ運搬セラレ尙研究

ヲ續行セリ。而シテ實ニ死ノ前日實驗動物ノ剖檢録ヲ調査セリ。其精神力ノ強烈ナル實ニ驚嘆ニ値スベク、氏ノ如キ研究ニ忠實ナル結核研究者ヲ失ヒタルハ豈米國醫界ノ損失ニノミ止マランヤ。令夫人常ニ故人ノ學業ヲ扶ケラレシガ近ク遺稿ヲ整理シテ發表セラルベシト云フ。

(今村)

腫大肺門腺ノ壓迫ニヨル痙攣性呼吸

(J. J. Clark, J. A. M. A. Vol. 78, No. 15, 1922.)

七歳ノ男子痙攣性ノ咳嗽ニ困ミ四ケ年多クノ醫師ノ治療ヲ受ケ種々ノ藥劑ヲ服用セシモ治セズ、劇場、日曜學校ニモ入ル事ヲ許サレズ。二年前扁桃腺摘出ノ手術ヲ受ケシモ咳嗽ハ治セズ、患者ハ猩紅熱、麻疹、百日咳等ヲ曾テ經過セリ、現今ニ於テハ熱モ無ク、喀痰モ無ク、眼及鼻腔等ニ疾患無シ。胸部ニ囉音ヲ聞ク能ハズ、心臟脈ニハ異狀無シ。ワ氏反應陰性ヲ呈ス。咳嗽ハ一分間ニ約五回強キ咳嗽ヲ爲ス。

「レントゲン」線ニテ診察スルニ兩肺ニ氣腫アリ兩側ノ肺門腺ノ多クガ腫大ス、種々ナル藥劑ノ今迄效ナカリシハ此淋巴腺腫大ニヨル壓迫ニヨリテ起ル咳嗽ナリト診斷シ、「レン

トゲン」治療ヲ四週間行ヒタルニ咳嗽ハ全然止ミタリ、其後六ヶ月經過スルモ癆瘵性咳嗽ハ起ラズ。(今村)

初期肺結核ノ一症狀

W. F. Linton Med. Rec. Feb. 4, 1922. (Abstract of The. Vol. VI No. 4, 1922)

著者ハ諸種ノ症狀ノ外ニ此理學的一症狀ヲ初期肺結核ノ有力ナル一症トシ此症狀ニヨリテ初期肺結核ノ九〇%ヲ診斷シ得タリトス。此症狀ハ一種ノ雜音ニシテ吸音ニ於テ聞ク多クノ場合ハ呼音ニハ聞ク能ハズ。第二又ハ第三肋間ニテ胸線ト中央鎖骨線トノ間ニテ聞クヲ常トス此音ハ「T」ヲ發音スベキ位置ニ唇及舌ヲ置キテ「Shu」ト吸音ニテ發音シテ生ズルモノニ近シ。此異常音ハ持續ノモノアリ又ハ二又ハ三部分ニ斷續セラルトアリ稀ニ四部分ニ分タル事アリ。(今村)

「アメリカン・サナトリウム・アソシエーション」ノ肺結核分類法

(Ann. Rev. The. Vol. VI No. 7, 1922)

ロックヒル、レーブルック、アンバーソン三氏ノ署名ニヨ

リテ公表セラレシモノニテ「ナシヨナル、ツベルクローシス、アソシエーション」ノ分類法トハ幾分異ナレリ。

第一、診察ニヨル分類

A、病變ハ Minimal (Incipient)、即初期肺結核ニシテ病變ハ輕微ニシテ一肺又ハ兩肺ニアリ他ニ結核性合併症ナキモノナリ。

症狀、Slight or none ナリ全身症狀ハ無キモノ或ハアルトモ輕微ナリ、體重ノ減少ヲ伴フ、體溫ノ上昇ハ輕度又ハ全ク無シ、脈搏數ノ増加ハ無シ又ハアルトモ著シカラズ。咯痰ハ普通ニテ其量少シ又ハ無シ。結核菌ハ咯痰中ニ存在スルモノアリ又ハ無キモノアリ。

B、病變ハ Moderate advanced 即中等度ナリ、病竈ハ初期ノモノヨリ擴大シ、一肺又ハ兩肺ニアリテ病變ノアル部分ハ合シテ一肺葉ノ三分ノ二又ハ一肺葉全部ニ相當シ空洞ノ症狀ハ無シ又ハアルトモ輕微ナリ、結核性ノ合併症ナシ。症狀ハ Moderate ニシテ局所全身症狀等シカラズ。

C、Far advanced ノ病竈ニシテ空洞ノ症狀著明ナルモノアリ結核性合併症ヲ有ス。

症狀ハ Severe ニシテ局所及全身症狀著明ナリ。

第二、經過觀察ニスル分類

- 一、apparently 'Cured' 總テノ全身症狀ハ消失シ、結核菌ヲ含有スル喀痰ノ排出無シ。カ、ル状態ニ二ケ年間普通ノ生活状態ヲ續ケタルモノナリ。
- 二、'arrested' 全身症狀ナク、結核菌喀出ナキ事六ケ月ニ及バルモノニシテ、理學的症狀ハ治癒セシ事ヲ示ス。
- 三、apparently 'arrested' 全身症狀ナク結核菌喀出ナキ事三ケ月ニ及バルモノニシテ理學的症狀前者ノ如シ。
- 四、'quiescent' 全身症狀ハ無シ、結核菌ヲ有セル喀痰アリ又ハ無シ、理學的症狀ハ停止又ハ治癒ニ向フ事ヲ示ス、以上ノ状態ヲ少クモ二ケ月持續セルモノヲ云フ。
- 五、'Improved' 全身症狀ハ少シ又ハ全然無シ、咳嗽及結核菌ヲ含メル喀痰アルコトヲ常トス、理學的症狀ハ停止又ハ治癒ニ向フ事ヲ示ス。
- 六、'Unimproved' 全身症狀消失セズ又ハ増悪シ理學的症狀ハ活動性又ハ進行性ナリ。
- 七、'Died'

(今村)

咯血ノ生成ニ就テ

(L. Rickmann : D. M. W. Nr. 9, 1932.)

セント・ブラジエン肺結核療養所ニ於ケル一九二六人ノ肺

結核患者ニ就テ觀察セリ。一九二六人ノ中入院前ニ六八三、即三五・五%ハ肺結核ニヨル咯血ヲナセリ、入院中ニテハ一五一即八%ハ咯血セリ、此統計ハゾルゴノ統計ニ大體一致セルモノナリ。

咯血患者ノ中六二%男子ニシテ三八%ハ女子ナリ、咯血ヲ主徴トセル初期結核患者ノ「イニチアル」咯血ニテハ男子ハ八四%女子ハ一六%ヲ示セリ。

十五歳マデニハ咯血ハ稀ナリ最モ多キハ一五乃至二五歳ノ年齢ナリ。

「イニチアル・ヘモプテ」ノ患者ノ豫後ハ咯血ノ度數多クトモ豫後ハ他ノモノニ比シテ良好ナリ。

無批判ナル太陽光線浴ヲナシテ咯血スルモノ多シ。

「ツベルクリン」及「バルチゲン」療法ハ其反應ノ強度ナル事ヲ避クレバ咯血ヲ來ス虞ナシ。

「レントゲン」線ニヨリテハ是ヲ正當ノ分量ニ用ユレバ咯血ヲ來ス事ナシ。

氣象ノ變化ニヨリテ咯血ヲ起ス事多シ。(今村)

工場醫ノ立場ヨリ見タル肺結核ノ早

期診斷法

(F. A. Craig, Am. Rev. Tub. Vol. VI No. 4, 1922)

工場ニ於ケル多數人員間ニ於ケル肺結核ノ早期診斷法ハ完全ヲ期スル能ハズ從テ工場ニ於ケル肺結核ノ罹病率ハ大ナル差異ヲ以テ報告セラル。

早期診斷ヲ可及的早期ニナスニハ平常ノ健康診察ヲ出來ルダケ精密ニシ一定時期ニ於テ之ヲ經過シ、又他面ニハ新入職工ノ健康診察ヲ嚴密ニナスベキナリ。

一、各個人ノ診察ニハ望診、理學的診察法等ニヨル事最モ大切ナルモ他ノ方法ニモ價値多キモノアリ。

二、病歴ハ大切ナルモ多クノ場合ニ明瞭ニスル態ハズ又患者ノ言ヲ信ズル能ハズ。

三、體溫ハ各個ノ場合ニハ大ナル參考トナルモ多人數ヲ觀察スル際ニハ其價値疑ハシ。

四、脈搏數モ參考トナル事比較的少シ。

五、職工多數中ヨリ肺結核ノ早期診斷ヲナス際ニハ體重ノ減小ハ最モ有力ナル著眼點ナリ。

六、血壓ノ低下又參考スベシ。

(今村)

補體結合物ノ母體ヨリ幼兒ヘノ移行

(J. V. Crooke, Am. Rev. The Vol. VI No. 2 1922)

結核菌乳劑ヲ「アンチゲン」トシ補體結合反應ヲ檢セリ、母

體血液ハ臍帶血液ヲ以テスレバ四二七人中三五一人ノ白色人ニテ七四即チ一七・三%ハ陽性ヲ呈シ有色人七六人中二人即三〇・〇%ハ陽性ナリ、補體結合反應陽性ナリトモ母體ニハ臨牀的ニ結核ヲ證明シ得ザルモノアレドモアルモノハ著明ノ結核症狀ヲ呈セリ、五八人ノ生レタル時ニハ陰性ナリシ幼兒ノ血液ハ六週又ハ六ヶ月後ニテモ尙陰性ナリ、出生時ニ陽性ナリシ一七人ノ幼兒ノ血液ハ唯二例ニ於テノミ第二ヶ月ノ終リニ陽性ニシテ他ハ陰性トナレリ。

此出生時ニ陽性ヲ呈セシ幼兒ハ臨牀的ニ又死セルモノニテモ結核ヲ證明スル能ハズ、著者ハ結核菌乳劑ヲ「アンチゲン」トセル補體結合物質ハ母體ヨリ血液ニヨリテ小兒ヘ移行セシモノトシ母乳ヨリ消化系統ヲ通ジテ幼兒ヘノ移行ハ重要ナル役目ヲナサズトセリ。

一、母體ノ血清ニ存在スル補體結合物質ハ其幼兒ニ移行スルヲ得ベク、幼兒ノ血液中ニテ數週間存在シ得ベシ。

二、此補體結合物質ハ多クノ場合ハ第二ヶ月ノ終リニ消失ス第三ヶ月ノ初メニテハ常ニ全然ナシ。

三、幼時ニテハ第一年間ニハ補體結合物質ハ發生セズ其故ニ生後、時ヲ經ザル幼時ノ血液ガ補體結合反應ガ陽性ナリトモ其幼兒ガ結核ナリト斷ズル能ハズ。

四、コノ幼兒ノ補體結合物質ハ母體ヨリ幼兒ヘ移行セシモノナリ。

五、補體結合體ノカ、ル移行ハ「ツベルクリン」皮膚反應ヲ陽性ト爲サシムル物質ノ移行ヲ隨伴スルモノニアラス。

食器ニ附著セル結核菌

(C. Hoyd and L. Frohlingham, Am. Rev. The Vol.

No. 1, 1922)

二十五ノ家庭ニ於ケル開放性結核患者ノ用イタル食器ノ洗水ヲ以テ「モルモット」ニ接種セシニ二一%ハ罹病セリ、普通ノ家庭ニテ用イラル、如キ温湯石鹼磨粉ナドニテ洗ヒタル後其食器ヲ食鹽水ニテ再ビ洗ヒ最後ノ液ヲ動物ニ注射セシニ二%ハ罹病セリ、結論次ノ如シ。

一、開放性肺結核患者ノ用イタル食器ニハ、普通ノ家庭ニ於ケルヨリモ注意深ク洗ヒタル後ニモ毒力ヲ有スル結核菌ハ附著スル事アリ。

二、カ、ル食器ノ最初ノ洗水中ニハ毒力アル結核菌ガ屢々存在ス。

三、開放性結核患者ノ用イタル食器ハ家庭ニ於テ又ハ公衆食堂ニ於テ結核菌ノ傳染ヲ將來スベシ、故ニ食器ハ嚴重ニ

消毒セラルベキモノニテ滅菌ニハ煮沸スル事最モ簡便ナリ

(今村)

抗酸菌ノ動物通過ニヨル毒力昂進ニ關スル質疑

(H. Lange: D. M. W. Nr. 11 u. 30 1922)

コルレ、シユロックスベルゲル及ファンチンステールハ先ニ抗酸性「ザプロフイテン」ガ動物通過ニヨリテ動物ニ對シテ毒力ヲ強クシ此培養ヲ動物ニ接種シテ結節及其結節ノ中心ニ乾酪性變化ヲ伴フ所ノ全身結核ヲ惹起シ得ル事ヲ報告セリ、ランゲハ彼レノ手元ニアル三種ノ抗酸性偽結核菌ヲ以テコルレノ試験ノ追試ヲ爲セシモ相反セル成績ヲ擧ゲタル故ニ更ニコルレ等ノ用イシ、菌種ヲコルレヨリ分與ヲ受ケ、之ヲ以テ試験セシニ、六種ノ培養菌ノ中ニテ動物通過ニヨリ得ラレシ二菌種即チ龜結核菌及蛙結核菌ノ培養ヲ以テ接種セシ「モルモット」ニ是等ノ全身結核ヲ認メタリ。ランゲハ斯ク強キ毒力ヲ得タル事ハ偽結核其者ガ毒力ヲ昂進セシニ由ルモノトナサズ。動物通過中ニ試験動物中ノ偶發結核(人型又ハ牛型結核菌ニ由ル)アリテ此偶發結核ノ病原ナル結核菌ガ培養セラレテ之ヲ偽結核菌ノ毒力強キモノナリト